2022 年度 個人研究実績・成果報告書

2023 年 4 月 17 日

所属	商経学部	職名	教授	氏 名	山内真理
研究課題	ICT 活用の外国語学習（音声学習・オンライン交流・ゲーム型学習）と自律的な言語学習者の育成				
研究キーワード	TELL, 音韻意識, リフレクション, ゲーム型学習, 動画活用、外国語不安	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連する SDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	10. 人や国の不平等をなくそう	該当なし	該当なし	

１．研究成果の概要

(1) オンライン教材を利用した「学習のサイクル」を再設計し、実践研究を行なった。VOA 動画を利用した自動採点式クイズの学習効果については、2022 年度春学期も 2021 年度とほぼ同様のやり方で自習・振り返り・授業での解説・練習という形で実施し、音声変化に対する習熟度テストを学期中に 3 回実施した。同テストの平均スコアは 7 週目の第 2 回で大きく伸び、そこから第 3 回のテストまでは横ばいと、2021 年度と同様の結果となり、音声変化に対する習熟度の低い学習者の最初の大幅な伸びは、短期間で観察できることが確認できた。その次のステップとなる練習教材の整備が 2021 年度からの課題であり、2022 年度はその開発に取り組み、試用を行なった。洋楽リスニングについても、微細な変更はしたが、基本的には 2021 年度と同様のやり方で実施し、Kahoot や Quizlet も定期的に取り入れた。事後アンケートに基づくと、VOA の字幕付き動画クイズ、VOA の音声のみのクイズ、洋楽リスニング、Kahoot やクイズレットを利用した活動のいずれについても満足度は高く、リスニングについては、「音声だけで内容を理解できる」、「音声変化に慣れ、知っている単語は聞き取れる」など全般的、あるいはボトムアップ処理については、ほぼ全員がこの授業で伸びたと回答した。「英文を目に入る順序で（英語の語順で）理解できる」など、リーディング力についても 8 割程度が伸びを実感した。洋楽リスニングについても、ほぼ全員が音声変化習熟に役立つと回答し、「歌える」ように（口が回るようになるまで）練習した、日々洋楽を聞くようになったと答えた学生も多い。Kahoot! や Quizlet Live では、「反応の速さ（自動化）」も重要であるという意識づけに努めた。ゲームでの競い合い自体がやる気につながり、スピードも重要だと実感した者がいる一方で、スピード勝負への苦手意識を示した者もいる。

(2) 教材共有、協働ティーチングについては、予定していた英語クラスでの協働ティーチングの試み 2 種類（①3 クラス連携および②2 クラス連携）に加え、突発的な事情により急遽 4 人で協働ティーチングを行うことになった③選択授業での実践を経て、オンラインでの教員間協働のポテンシャルを実感し、いずれのケースについても、学生アンケートより一定の教育効果を確認できた。

①は対面授業同士の連携であり、同じ学生で構成される 3 つの英語クラス（英語 A, B, C）を担当する教員同士が、Teams チャットにて毎週の授業内容と授業中の観察を共有し、教員間で情報共有していることを授業時のリマインダーやアドバイスの中でも示し、さらに筆者の担当する英語 C にて A, B で学んだ語彙や表現を復習させた。事前事後の英語実力テストでは、短文問題について有意な伸びが見られ、事後アンケートでは教員間が連携していることが学生の動機付けにつながっていることが示唆されたが、これらについては今後も検証する必要がある。想定していなかった発見としては、教員による学生観察が予想以上に行き届くことが挙げられる。A, B, C はそれぞれの到達目標に向けて別々の授業活動を行うが、あるクラスでは振るわないように見える学生が別のクラスでは活躍していることが分かり、「振るわない」ように見える学生に対する教員の意識変容につながったケースが何度かあった。これについての報告は 2023 年度 7 月に公開される予定である。また、2023 年度は、教員による学生観察の点でのメリットを念頭に置きつつ、授業間での反復（復習）をシステマチックに行い、事前事後アンケートに基づく英語に対する意識の変容、実力テストに基づく学力の伸

びについての検証を行う。

②も英語 2 クラスの連携であり、こちらは筆者の担当する英語 A（リスニング中心；リアルタイム授業）と英語 C（コミュニケーション中心；対面授業）において、同じ VOA レッスンを中心にそれぞれの授業活動を組み立てるというやり方である。事後アンケートに基づくと、このやり方に対する学生の満足度は高く、さらに調査項目を増やして研究を続ける予定であったが、教員配置の関係で 2023 年度の研究続行は叶わなくなった。③の実践と合わせて、報告をまとめたいと考えている。

③はオンデマンド授業であり、(a)難易度が高めの VOA 英語レッスン動画を用いたクイズ（振り返りセクション付き）・(b)ビジネスや社会に関わる語彙や表現を身につけながら文法構造を理解する TOEIC 形式のクイズ・(c)ドキュメンタリー式の VOA 動画を用いた Watch & Read クイズを学習教材とし、(d)授業や英語学習についての「質問」課題を毎回課した。(a)は 2020 年度に 82 レッスン分用意し、以来、利用しながら修正や別バージョン開発を行なっている教材であり、(b)は下書き版として用意していたセットを分担で見直し、修正を行いながら利用した。(c)は、この授業を期に共同で開発したものである。オンデマンド授業では、教員からのフィードバックが極めて重要であり、本実践では、(a)～(c)についての解説とフィードバック、および(d)に対するフィードバックを分担して行うことで、良質なフィードバックを行うことができたと考えている。事後アンケートに基づくと、受講生の満足度は極めて高く、特にフィードバックに対する好評価が目立った。今回は突発的な事情により協働せざるをえなかったが、協働ティーチングのポテンシャルの高さを実感するとともに、オンラインクイズの有用性とフィードバックの重要性を再認識する機会となった。上述のように、②③についてのデータ分析と実践報告を合わせて今年度中に行いたいと考えている。

(3) 二言語併用の動画交換を軸とする非同期の交流と Zoom を利用したリアルタイムの交流については、2022 年度も、春学期、秋学期共に幾つかのパターンで実施を行った。授業の一環として行う上での課題と留意事項を整理すべく、現在、収集されたデータの分析作業を行っている。

２．著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

“Individualized Bottom-Up Listening Skills Training through Self-Access Materials and Real-Time Instructions.” *Proceedings of EDULEARN22 Conference 4th-6th July, 2022: 14th International Conference on Education and New Learning Technologies,* 4791-4796. 2022 年 7 月

【著書・論文（査読なし）】

「ボトムアップ処理力向上のためのリスニング指導：プロセス志向のアプローチに向けて」千葉商大紀要 60(1), 37-59, 2022 年 7 月.

【学会発表等】

- 「英語教育における授業複線化と即時フィードバックの試み」神谷健一, 山内真理. 第 15 回（2022 年度）JACET 関東支部大会 2022 年 7 月 9 日（招待有り）
- “Individualized Bottom-Up Listening Skills Training through Self-Access Materials and Real-Time Instructions.” EduLearn 2022, 2022 年 7 月 5 日.

３．主な経費：書籍・各種ソフトウェアのサブスクリプション

４．その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

（本文は 2 ページ以内にまとめること）